

猛禽類調査へのビデオカメラの導入

精度が高く、効率的な調査実施のために

●調査時にはビデオ撮影を行って個体を識別する



図中の猛禽類：①ハチクマ、②イヌワシ、③クマタカ、④ミサゴ、⑤サンバ

ポイント1：高い調査精度

猛禽類調査における観察の際に、最も重要でありながら、非常に高い技能が要求されるのが個体識別です。映像があれば識別できる数が飛躍的に多くなり、間違いもほぼなくなります。

- ・羽の欠損や損傷はズームして確認します
- ・動画だから多角度から総合的に判断します

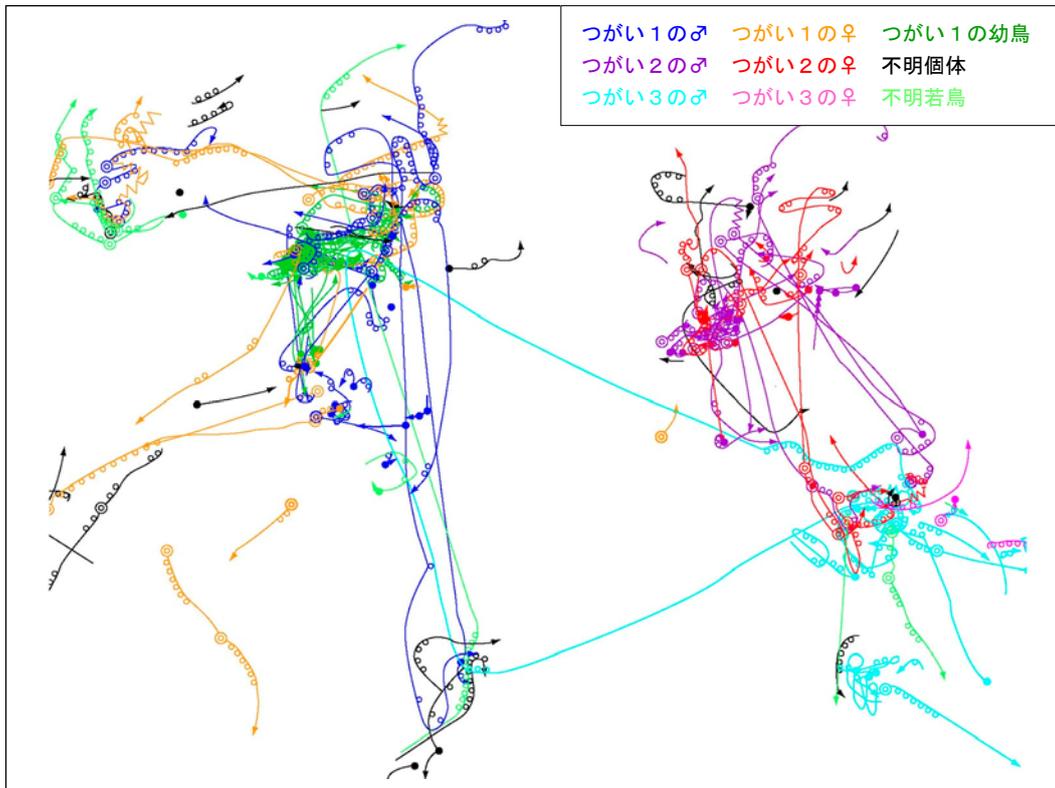


【機材の工夫】

撮影においては、拡大すればするほど解像度が低くなるとともに、ブレやすくなることから飛翔する個体をなめらかに追従することは難しくなっていきます。しかし、少しでも大きく、きれいな映像を得るため、接眼レンズの工夫や、ビデオ用三脚・雲台、解像度の高い光学機器、双眼望遠鏡等の導入を行っています。なお、これらの工夫はより遠方の個体の発見にも結びつき、一人の調査員の観察範囲が広がります。



●とりまとめ時には個体識別が結果に反映される



【色の付いた飛翔図】

下の図面に対して、左の図のように多くの飛翔に色が付くと、何羽いて、各つがいほどのあたりを行動範囲にしていて、行動の中心はどこにあるか等がよくわかるようになります。なお、注意すべきは、比較的狭い範囲に3つがいもいて、さらに図の右下付近には、2つがい、つまり4羽の飛翔が見られることです。観察だけで4羽のうちどの個体であるかを見極めることは困難ですが、ビデオで撮影した映像があれば、自信を持って色を付けることができます。

識別できていないと真っ黒何つがいがある???

ポイント2：効率的な調査の進行と正確な結果

出現の観察時に、いつ、どこで、だれ（個体）が、何をしたかについて正確に把握されると、その出現時の行動の種類（繁殖に係わる行動、ハンティングに係わる行動等）がわかります。特に猛禽類は1年を繁殖周期として生活しており、繁殖ステージ毎に見られる各種の繁殖に係わる行動を確認することは、繁殖生息分布調査の段階では早期の営巣地の発見、内部構造調査段階では解析に必要なデータの蓄積につながります。さらに、正確かつ十分な結果をもとに内部構造図を描くことから、事業への影響予測、保全対策の立案についても適切に行うことができます。



●猛禽類調査での実績等

・CCDカメラを用いたビデオモニタリング調査

（事例数：4、繁殖周期毎の行動および餌動物について解析を行っています）

・事業予定地と営巣木の距離が近い事例における保全対策の検討

（クマタカの繁殖周期を考慮して決定した施工工程によって事業を実施するとともに、工事中は目視およびビデオモニタリング調査を行って、既往の結果よりあらかじめ設定した異常行動の有無をモニタリングしています。現在のところ、巣の位置は変わらず、繁殖行動も行うのが確認されています。）

